指導がうまくできなかったとき、こんな視点でふり返るようにしています。

？　適切な課題であったか？

課題が難しすぎると、やる気をなくします。

反対にやさしすぎると、いいかげんになります。

子どもの力に見合った難易度であることが大切です。

幼児への個別指導では､｢もうすぐわかること｣｢もうすぐできそうなこと｣を課　題としています。

児童への個別指導では学習の補充に取り組みます。

教科書の難しい課題には、解き方のパターンを教えます。

そのパターンでいくつかの問いに答えていき、習得すること、記憶し定着することをねらいにしています。

？　適切なモデルを提示したか？

その課題をやり遂げるためのモデルを提示することが必要です。

たとえば、新出漢字を視写できないときには、ノートに手本を赤で書いてなぞらせます。

マスの横に一画ずつ手本を書いて、写させます。

マスの横に書いていくのを見せて、写させます。

マスの外に書いて、それを手本にして写させます。

一マスに書けないときは、四マスを使って写させます。

？　適切な評価をしたか？

できないことばかり指摘しても、子どもはやる気をなくしていきます。

できていることを評価し、定着をはかります。

できていないことについては「～すればできるよ。」と教え、取り組ませます。

？　見通しを持たせたか？

何をどれだけすれば、おわりなのか？学習の前に示すようにしています。

「はじめに　発音の練習をします。つぎに本読みをします。そして算数をします。」

終わるときは

「はじめに発音の練習をしました。うまくかぜの音が出るようになったね。そこにウをつける練習をしてきてね。」

「つぎに本読みをしました。読むときもゆっくり読めるようになったね。本をもっていなくても、何が書いてあったかわかるよ。」

「おわりに算数をしました。計算がはやくなったね。」など　もう一度、評価しながら、はじめとおわりを意識させます。

※これは自分が今までにしてきた失敗の中から出てきた視点です。

親御さんに家庭学習を勧めるときの助言にもなります。